

次のような望ましい条件を考える。

1 分布広くまた多生するもの

その地の属する植物帯の主役種、当地方では、クリ・ナラ・カエデ・クヌギなど、また、ヨモギを筆頭にツユクサ・ヤブカンゾウなど路辺雑草。このうち、すでに定着して分布をひろげている帰化植物には世界的広布種も多く、寒暖の適応巾の広いものがあり道あるところ必ず出会うので指標として重要である。シロツメクサ・アカツメクサ・ヒメジョオン・アレチマツヨイグサ・エゾノギシギシ・カモガヤなど多い。木本のニセアカシアは標高1500mまでも見られ、花、葉共によい指標である。

2 野生種が望ましい

畑作物は類似品種多く、花期まちまちの傾向あり不適当である。

3 顕著な花を持ち花期の短いものは最適

この意味では庭園植物も好都合である。オダマキ・ヤグルマギク・ボタンなど。ただし、新品種は避ける。花期の変っているものが多いからである。ヤグルマギクは最近栽培が少ないがフランスギクと常に花期が一致するので注目したい。

生長度観察の注意事項

1 適地に生育しているものに注目することが大切である。草丈の比較の場合特にこのことを注意しなくてはならない。戦後ひろがったアメリカセンダングサは、水辺を本拠として周囲の乾燥地にも出るのが、両地でその草丈は著しく違う。オオイヌタデ・オオバクサ等も同様であるがこれらは本拠地のものによらなくてはならない。

2 耕地のものは避ける。

耕地雑草の中にはヒメオドリコソウのように、畑地の場合と路辺の場合、花期の異なる例が少なくない。

3 遮へい物による日照不足の部のものは避ける。建造物の南側日だまりの部のものも異常である。

4 一般に微地形に注意し日照、通風等の過不足に注意する。

5 途中で切損し、再生した株の花期はおくれる。ヒメジョオンなどによく見られる例である。

6 特に必要な注意は、類似種で花期のずれているものを区別すること。例えばアレチマツヨイグサの花が終ろうとする頃、メマツヨイグサの花期が始まる。メドハギとカラメドハギの花期も全く異なる。

観察の結果

植物が気温に最も敏感に応じて活動しているのは、当地方では3～4月の候であり、従ってこの頃が植物の気候指標として最も有効に働く時である。

ただ注意されるのは、早春地下から芽吹くものは矮性の草本が多く、これらは極めて局部的の微細地形によって起こる微細気候に応じて開花の時期が極端に変わることである。同じ松本市内でも、女鳥羽川の河床の北壁に沿って咲くセイヨウタンポポやオオイヌノフグリは、中央公園の広場に咲くものに比して10日ほども急ぐものもある。この公園内の植物季節は市内ではややおくれ、松本市外（野溝など）に比して僅か1～2日早い程度、市心部一帯が3～4日早いのに較べて、明らかな差を見せている。微細気候は問わず、比較のスケールを大きくする時は、木本の開葉度や開花度に頼る方がよい。

気候が進んで、6月末7・8月となると、開葉はとうに終り、開花も大方すみ、指標性のあるものは急に少なくなる。この頃はすでに、気温とは無関係にハギやススキ等の短日植物が咲き始める。

このように、気温との関係は、春から夏に順次うすくなるので、開花度の指標性が十分期待できるのは夏至までと考えなくてはならない。

結 び

生長度表に掲げられた指標植物は200種を越しているが、実際に対比を行ってみるとなお不足を感じる。植物の個体の差や環境の差から起こる判定の誤差を消すためには、成るべく多くの対比例に頼る外はないからである。

ここに掲げられたものは、指標植物として特に優れた条件のものを選定したというほどのものではない。条件を厳重にして数少ない指標植物を選定することではなく、むしろ、成るべく多くの植物を対比して気候判定に利用することの意義を強調しようとしたのが本稿の主意である。

〔植物ニュース〕48. ビロードモウズイカ *Verbascum thapsus* L.

奇妙な傾曲、奈良井川（二子橋）に多生するこの植物、突然（'80.6.18, a.m. 6.30 観察）茎の先端花序の最下辺（先端から7～10cm下）で一斉に傾いた。方向は南南東が主、風のためではないよう。鎖川ののものにも見る。翌日までに直立した。前夜の雨のためと考えても見たが以後の雨では起こらず、溜水実験でも異状起こらず、太陽方向との関係もまちまち。更に不思議なことは、一株を根元から東に45°傾け翌朝見たところ、直立すると思いきや90°起き返り（つまり西へ90°）、その翌日45°戻って直立した。（浅川富雄）